

「族長・アブラハム」

2014年05月07日

「信仰の父」と言われている最初の族長・アブラハムは背が高く、筋肉質で、長い髪とひげをたくわえ、荒れ野の風に吹かれて、孤高に立つ姿を、私は想像します。彼はひたすらな求道者です。父と家族と共にハランに住んでいれば、何不自由なく生活できたのに、そこに留まっていれば、心が腐ると思ったのでしょうか。まだ見ぬカナンに向かって、真実を掴みたい求道の思いに駆られて、旅立ちます。

そのカナンの幾多の苦難に出会います。まず、飢饉に見舞われ、エジプトに逃れます。美しい妻・サラのゆえに殺されることを恐れ、妹と偽って、身の安全を図ります。また、甥・ロトが住んでいたソドムは肥沃な土地であったため、王たちの争奪的になり、戦火を浴びます。アブラハムは捕虜になったロトを救出するため、戦いを余儀なくされます。更に、彼にとって家族間のいさかいは苦しいものでした。妻・サラは子どもが産まれないので、女奴隷・ハガルをアブラハムに与え、イシュマエルを得ます。ところがその後、サラは一人息子・イサクを産みます。イシュマエルとイサクの間で、相続問題が起こるのを嫌って、ハガルとイシュマエルを荒れ野に追放します。残酷な話です。アブラハムはカナンで味わった苦勞と苦悩の中で、神の真実を受け止めていきます。

その真実は、創世記 15 章に記され、アブラハム物語の中で、私が最も好きな個所です。彼は、神の約束の確かさを求めます。神は、牛と山羊と羊を真つ二つに切り裂き、向かい合わせに置けと命じます。これは当時、部族間で平和契約を結ぶ時、裂かれた動物の間を、部族長たちが一緒に通り過ぎ、約束を破った場合、この動物のように、体を真つ二つに切り裂いても構いませんという儀式です。

神は、アブラハムにこの儀式を用意させたのです。日が沈み、暗闇が襲ったころ、煙を吐く炉と燃える松明が、二つに裂かれた動物の間を通り過ぎます。そして、契約を結んだと宣言します。煙を吐く炉と燃える松明は神ご自身でしょう。神は実行されました。しかし、一方のアブラハムは通り過ぎていません。神は通り過ぎ、あなたに対する約束は守ると言われますが、アブラハムには通り過ぎよとは命じていません。神は、アブラハムが約束を守れないことを知っているからです。神の真実とは、人間に何かを求めることなく、一方的に愛と祝福を約束するということです。

新約聖書で、パウロの言葉を「キリストへの信仰によって義としていただく」と訳しています。信仰が「義」に与る功績のように取られ兼ねません。正しくは「キリストの真実によって義としていただく」です。キリストの十字架と復活の真実だけが、私たちを一方的に「義・よし」と是認し、神と共にある赦しの中に置いてくださる。

アブラハムが求道の中で知った「神の真実」とパウロが語る「キリストの真実」は同じことを言っています。人が正しいことをしたからとか、悪を行ったからとかに関わりなく、神は無償の恵みを与えてくださっている。この真実を知る時、生かされて生きるということが、喜びをもって始まります。